繪本拾遺信長記

六

へ15
3564
6

門へ13
號3564
卷6

稲田大學図書館
昭和34.6.3
藏書

織田信長記初編卷之六

目録

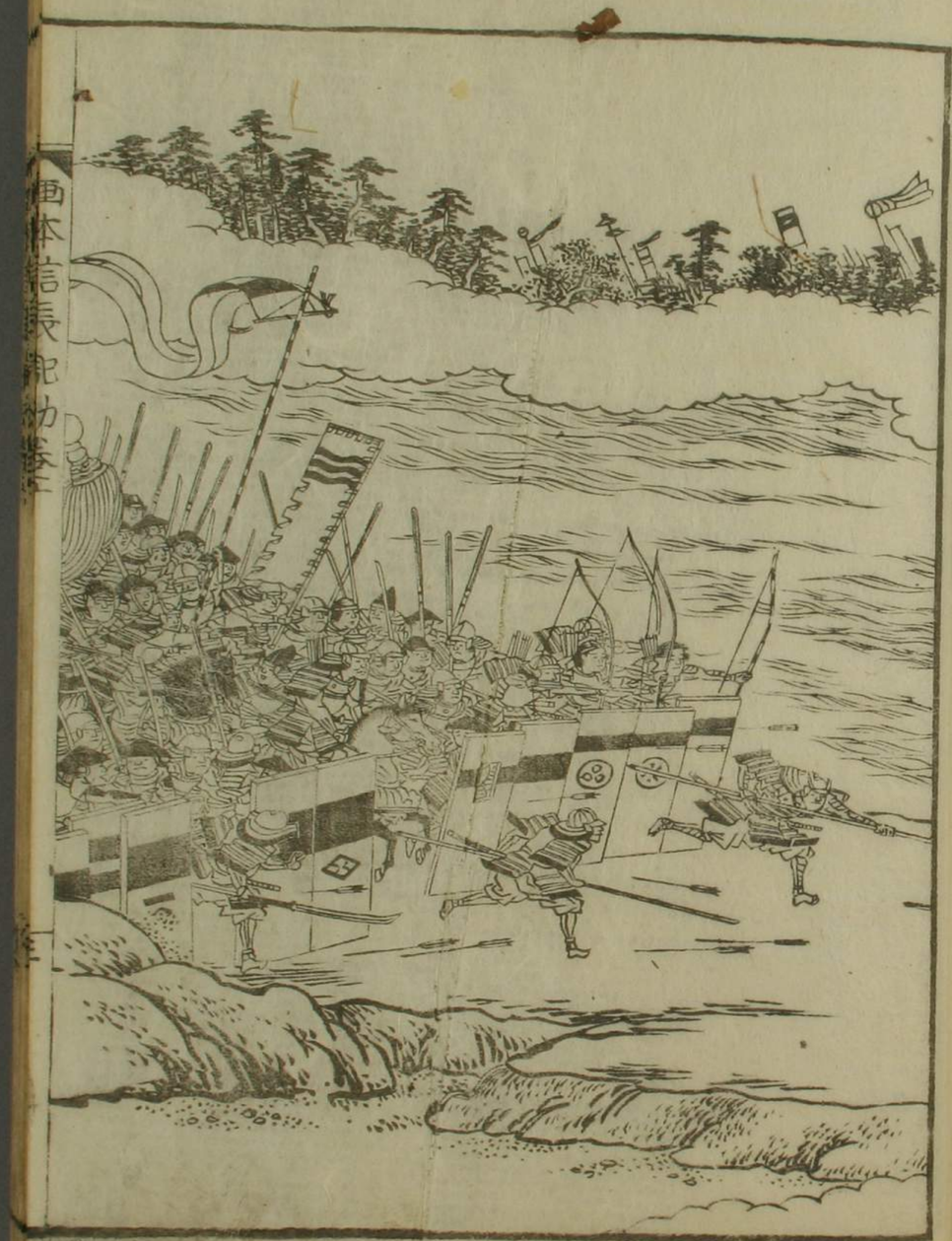
上人自吊討死者事
澤歩堤合戦
上人自討死乃者と吊ひ給ふ
朝倉濱歩坂本出張之事
月圓
秀吉退陣の計議とみる
信長御攝州退陣之事

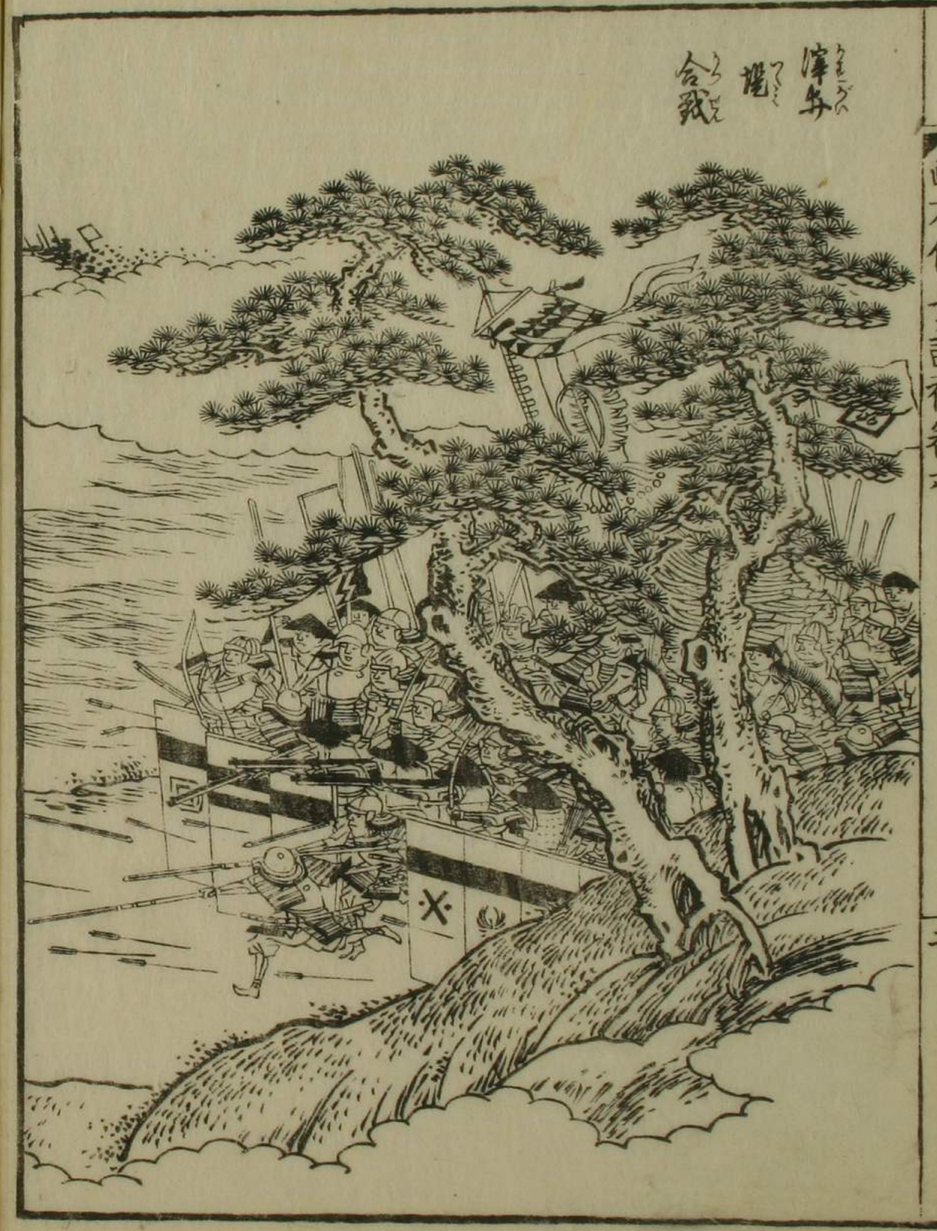
信長長柄川より紅橋と掛る
秀吉紅橋と折崩して三好勢と川中に敗れ
佐々牧方合戰二条
石山勢級軍の事
月國
玖木重率荒木村重と戰ふ
重率秀吉と合戰ふ

繪本拾遺信長記 卷之六

上人自吊討死若事

扨も澤井堤の合戰小田勢さんぐゝに敗し引ぞくゝ足へ引る所
を信長乃下知として麻惠多政友湯門年家八百余騎の遣兵
を率し味方の軍を助んと搖にうんぐ来りうる小深して合
戰雖義の体なれども人々れば何ら志だし牧豫べき其一文字な
川を渡し勝湾る石山勢の志中へ面もふり出討てかゝり四度
の勇乎十騎くまなく切散せば門徒勢新手の勢を切
崩されて度迫に成ぬく引列を通とし拙し麻惠多が一軍其外
佐々福富湯浅が軍うりうしく追討かゞ小石山勢さんぐゝ
成ぬく討るく希敗を知り沢山附な敗寺より玖木重率が下




澤手
攪
合戦

知として下向出来す又百余騎と引率し援の為とて押寄り互に
彩を放ち暫て時刻を移し戦ふこと此時日も晩に成て互に勝敗
なしがたく双方揃て軍を引きもおとさるる此合戦
小田方の討死六百余人石山勢二百余人討死しかり所如上人この
度を守り百姓つゝく強き悪しき法の死と外曲論の間に堪めて上人自後は盛佛の為とて懇に吊ひ給ひ
いかし業因浄しして今日の軍に討死せざりしそや活如来の御門を
の御吊ひに参り何者か盛佛なさでみべきやなる浦しの討死の
人々やはり後合戦に参行うべ一番に討死未来佛果の樂を共に
と願い願ぶ者もあり武い嘆涙に強くもあり此一ふに驚るもの

大なる士卒いえ共なり兵粮炉く繁くまぐも死と雖ども者は一人も
ねしさしも英雄の信長も終に本願寺と切崩とも強ざるは只一つ
にはつく之かくみぐく本願寺勝に為の為とも上人は一向談味方の
為員討死を強き給ひ幸を百万とも給ふる軍師諸葛孔明
計略を秘ひ百度戦ひ百度勝とも戦幸にいたりて唯戦くは
信長としてお国へ退しめ両家合戦の止んをそなたまれけ
ると涙を抑へ宣ひ給ふ小幸運でやはり給のごく誰か闘
戦を強ひ孔を好む者いんや他もとも信長三好と討と名し
て其実い岩山を責る小あり山所に三好の一党退去とるしも
又い滅亡しうるも信長軍勢と伴せいよ〳〵本願寺と責討
る急るべ合戦の止ざるる勢力と人強て信長を退

上人自ら討死の
者と
弔ひ
給へ

くんとゝめさが甚一ツの計策あり弧矢の朝倉義景いと人の親族はして信長と代々の怨歎あり江州浅井父子と朝倉と一味ちゝく信長と弾指とゆゝ今齒山より俊希をゝて浅井朝倉乃両家をかゝゝひ軍勢を發し上洛せゝめい信長後の為ひを恐き忽ち軍勢をまゝめゝ本國へ引元ゝ他人と偽て歎と征をる計策ありと上人伝へ聞めしたきふ脱び給ひ七星三河守撰田を賜両人を俊希としてはゝこゝまゝゝ中せ浅井朝倉が本國へ発し給ふ扨も山附信長卿中務の本陣を拵ひ清井堀の級軍地村城中守が計策を伝聞き驚いゝゝくゝ山嶽と晴をべきこゝまゝゝゝ思惟みるゝがきゝゝとゝ出てゝ馬と馳て江州横山ゝ在城せ本下義吉とぞめゝられゝゝ

朝倉浅井坂本出張の事

去程ゝ本能寺の俊希七星横田の両人別如ゝ人の仰と受け浅井朝倉ゝ利害所上洛と俊ゝ乃浅井下野守久政ゝ息飯茶守長政ゝ逆ゝ級兼ゝ別俊を朝倉ゝ通じてゝ上洛を進めゝれゝ元来朝倉義景武ゝ跡き大ゝ乃義甫の浮説ゝ一変せざる様武邪ゝ義景ゝ嫡ゝ出て中乃ゝ本能寺の中条浅井父子ゝ何ゝ也極の乃理ゝ伝へゝゝ人信長若三奴を已本能寺ゝ勝利を拵び其勢ひ強大ゝて西ゝ齒國軍勢とゝ向けべ甚附いゝ防禦ゝるゝも折勝乃ゝ光秀ゝ今浅井父子と縁ゝ合せ大坂と挽んで見と計び信長と元ゝんゝ雑きゝ乃ゝ國と外ゝ後悔ゝ強ゝゝと落乃ゝれ義景浙

言ふ腹〳〵祇園の軍兵二万余騎を催し居城一乗谷と出さく江州
へ發向し浅井ふ[illegible]を[illegible]さく大小数び[illegible]も江及び兵庫ふ余人と集
朝倉と勝とをいわせ江州坂本ふ布陣して京と石山のたすけを[illegible]合せ
ろう[illegible]ふ諸方ふ[illegible]へ〳〵[illegible]れるうろれば信長大きふ弱るきこと
い妻うへ及ぶまてみうる畠園義い[illegible]も南もあり朝倉浅井ふ軍う
王城ふ煙ととげさせうば末代とも[illegible]軍家の[illegible]信長ふ[illegible]
色しいふ[illegible]て畠園と[illegible]ひ[illegible]て小國勢と退退んなるう
三好が一党ふ[illegible]寺の一揆法を[illegible]安穏ふは引せはじいるる計
略をいまて退くべきやと種〳〵評議ありける[illegible]本[illegible]義右助秀
吉条若のよ[illegible]云よ[illegible]信長大きふ数び急ぎ對面して退陣の計と
同治ふ秀吉濃で承り御後の通りは退にてそ[illegible]ひ人某うけ治う

る所り仕ぶきるい同御退陣は三好ふ祇寺の城後ろ退寄る
〳〵も粉のごく色して若の軍威を輝し色に某ふ心ふりいい
御令弟九郎信治この義らせ治へ江州ふ[illegible]山の城之朝倉浅井
上治ふさば先ふ[illegible]山と美色しは惣敵の有とうび御陣國の
ろを遮り且東國小國の通治と塞ろ色冠くさるを[illegible]
信治ふ力を添義城を[illegible]國ろしめ治へと云信長其言に[illegible]
たびひ森三左衛門可成ふ三ふ余騎の道兵とふへ[illegible]山へ[illegible]
む秀吉い御者と退き殿ふ退にのふ分を[illegible]諸ふ面[illegible]て
謀とを合せ退陣の用意ふ[illegible]〳〵[illegible]祇寺ふは小國へ[illegible]せ
〳〵七里三河守横田ふ船之[illegible]浅井朝倉岩山ふ[illegible]
江州坂本まぐ出張のよ[illegible]ふれば上人を[illegible]ひとりふ[illegible]

淺井朝倉
江州
坂本
出陣

まろうびて城を落さば信長の為地退去もなどあるべし間者と入て敵の動静をうかがせよとて物ものしうる無びと金て窺いせけるが明後廿三日熱軍為地を陣拂ひ陣を張ると陣中騒動大方なるべしとやはりかの教寺中の諸ねいさまえさうべ大軍と呼退討と法敵の根を断んと躍り上りく罵るぞ珍本重幸光と制し一度の評議大きが遠つり此後より度くの戦ひの味方勝利を見るるの色濃の勝利なるべし信長元来味方の勢と百性一揆と見あるべどうぬるうよ除じて謀計をも構へ只一息の表崩んとし其機と計て奇計とかてるひ虚を仕て実を討が成る信長按外の級をとるべし此度退に来る矣るべ三好為ふの強敵を後に洛安朝倉の大軍せまるべう其中を抜ひく軍と引く国へ帰る信長

よいべくも後へ引して退くべきや拾信長をいうる者と見落よ
ぞや又後守世よ色時まぐ吳利家の信長をうしろ今川と乙
し三好と退ひ他く本て迫り洛安朝倉が地と縮り為軍家再真の名を
擬ひ絶よい天下と保吾せんと思ふ間のねるうんや色と拔く
る信下い誰くぞや柴田多久間慶恵多瀧川他く本下る計多明
智をはじめと一人為るの軍ねる数十負明く兵卒悪く軍ろ夕熟
し実を仕て敵射せば味方の十人を仕て敵の一人を為るも勝利
を得んるひももひ〳〵しく退討てりろき級軍と成ひ
そと言と為て止る家人地田福藤の三好が一党より本教寺（後者
を仕て本城ろ敵い小国の朝倉洛安大軍を敵）坂本を出張せ〳〵
ま信長為地よたまひ廿三日曉天熱軍と引拂ひ帰国敵をのは

秀吉
退陣の
計議を
為る
永通寶
永通寶

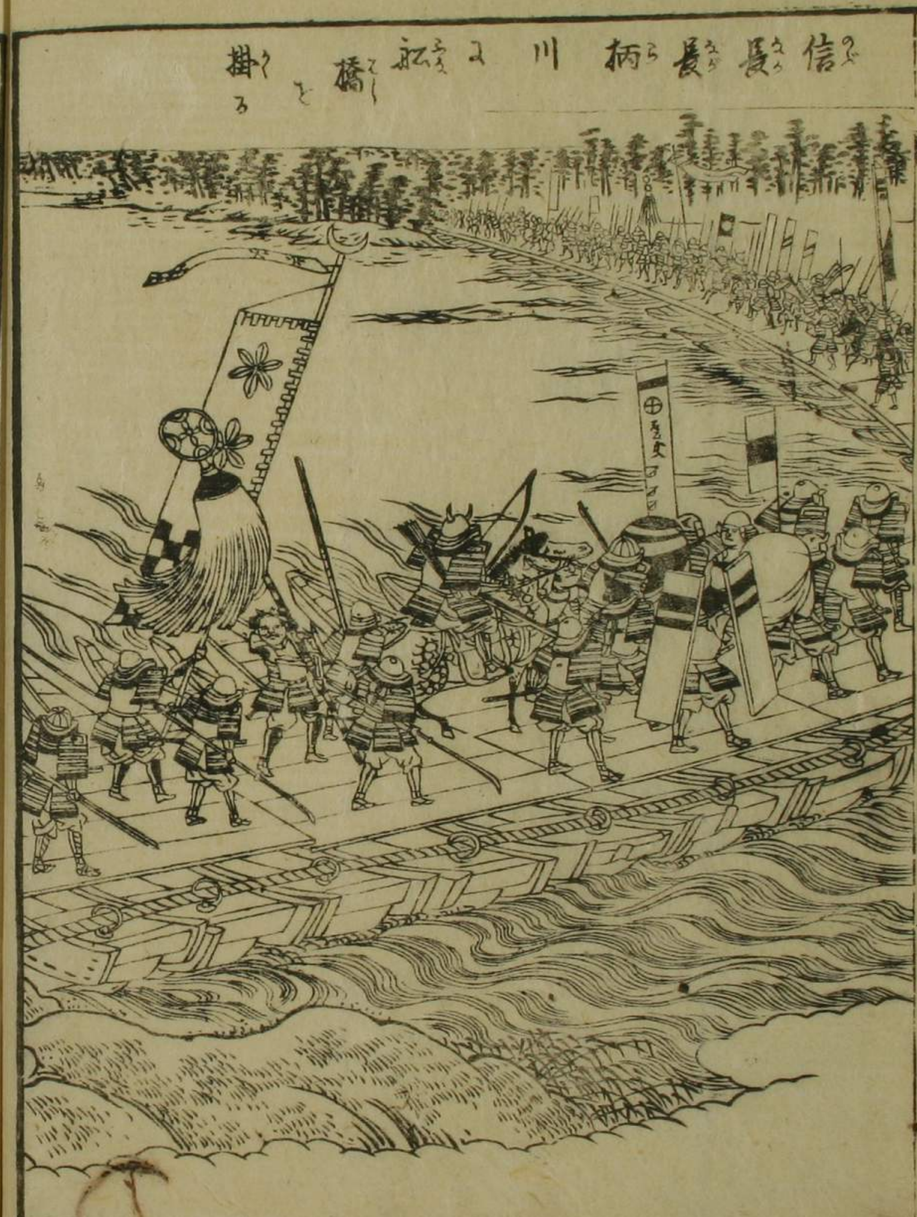
陸に取りかゝれ三好家においてハ大軍を以江口の渡りを越て山崎
のかゝりを退討し信長を討んと結構に及べバ本願寺の御勢ハ牧
方八幡の方へ軍勢を向ら五万を合せ表裏なく信長たちへ魁神へとも
討のしなバ程じ此儀謀じ合せんため使を以て申され侯ハバ江濱
者とれバ門徒の諸ねにありやいさゝか軍師の信長を稀なる事見て甚
急に乃今三好勢と合体し巡見する小田勢を討んに何の恐あるべき
然れや此時を失ひて後悔をとも甲斐なきほどにと又打立たれあり
とまありと重幸其制を呈しまされ共氣を再び止めバさらに謀計を
構へて遊らるゝへし鉄へを残しとく軍配をもて下知しける本門
粟津の靱太橋本浩を吹けるれ信長退去乃石前ハ渡川の
南の岸佐吉牧方を退く事ならし海為八百余騎を引率し佐吉乃

森に埋伏し小田の軍勢を待ける時中軍へ鉄炮とおちけ一発二発三
に切崩せ西條軍母撰田白膳西川勘解由侍衆を始め一万福寺如意
寺三千余騎を引て後面より立ふさぎ粟津去橋か伏兵数らバ
急に進んで敵を討取じ上原備内今井権七ハ千余人を引卒し
渡一口に埋伏し小田勢の鉄へを執え迎まるを機に数つて鉄炮を
うち出しかバ長退せられしく引き退くに手配り流に定りしかバ猶く
軍勢を引まとけ翌廿二日の宵の間より立ひくにうちたる

信長卿摂州退陣之事

元亀元年九月廿二日の夜より木下藤吉郎秀吉諸方の手配り恙
くや渡しさまぐの謀計を構へ十分の備へと定し程なる二十三日
暁天に退陣を催しける先鋒にハ久々間右衛門射佐久間兵衛

信長柄川を紅橋を掛る



池田丹波守又ハ余人中軍ハ信長御南妙法蓮華経の大旗と
押立させ柴田権六郎勝家森蘭丸郎左衛門
木下藤吉郎明智十兵衛福富平左衛門林新三郎原彦破河内守ホ
二万余人後陣ハ摂州の住人荒木摂津守伊丹兵庫頭二万二ヨ
余人都合其勢三万七ヨ余人を余国くの軍兵三万余人ハ悉く
暇賜り明廿二日居城〳〵退散仕ハ者ハ兵粮と厩ハ木下秀
吉ガ計ひたり扨も無軍隊伍をとゝの〳〵帰陣なる山崎信長ハ木下
藤吉郎と共に道華一ヨ余人引ぐし寄ヨ軍中を出く長柄
川ヨ舟橋をうけさせ打渡つゝ引返ス後人ハ無軍ハ信長の地を見る
体よりそ白七ヨの大旗川風ヨ靡〳〵守ハさして押出ぬ中くろ
不ハ柴田勝家の新城ヨ義ろう三好日向守ハ摂中守細川六郎

岩風を祝ぬ余人信長を討んと馬と跳て退うけ長柄
川ヨ来てこれハ舟橋をかけそたゝ小田勢ハ引返し体ヨ三好勢
何の心慮ヨ五づゝ渡せやまさせらヨ迫てそなのし舟橋
を押合ひ合渡り多小向人の岸ヨ一村荒ヨたる森の内より
赤革の具足ヨ冠を固めたる武者一騎ハ〳〵れ出大ヨ呼
名のいう小三好の郎兵ヨ我言と呼ヨ中け出河日本に聞て人の
来く命と遂ろハ何ようれて濃足せり彼別の絵う物ヨん来く異
途の去者ヨせよと云そと見へしが天地も崩る驚して彼舟橋
を石火炮ヨて打弾けば橋も人馬も粉ヨ為く浮ぬ流ぬ流けるを
山附料の森の中より瓢覃の馬下るくとしとけ木下が良る

秀吉
紅
揚
と
かち
崩し
と
三好勢
と
川中又
戦
れ

朝は勝頼笑ひ恥辱を先とし五百余人の軍兵秀吉を守護し
走りくと退きいなしうろたへ三ぬぎ後軍先と見くく歯を
噛まぎり無しかもとしその大河渡り多くの郷もうく無軍川岸
よりうつ只ひたすらに切る斗之枝も叶はず乃にい小田の軍勢隊と孔さ
ぬ走りくと引形を石山勢三万余人後に走りつく追来る小田
の張殿荒木村重右計多勝政伊丹親眞守口の辺りまで久
しゆにも村重い大勇の武士なれば只余りの大方表向よりおさし
おの来る歌七八誘ものれ切落勢ひよ奈て教例とれば石山勢
さんぐよ為くえの道後に走る村重名逃る歌を追捨はて佐吉
の森を通る家に走るくも石山勢後に附く追来り叶ずて
出花とちし戦ふうち走小玲本竜寺ぶ知にすけく叶森よ

懸休しうる栗津を秋去橋平次八百余騎附ないはと小田勢の中
軍へ鉄炮の音先とそ後へ一日はどんとおうけうう小田の無軍大きに
驚きうるあうさまして一支もさべしてかと赤へさんぐよ為く後
気とれが門後勢勝よ奈て一人も余ぬうと走くよ罵り五三度
よ進ぐる後よ牧方もうぎ禁ぬ走くうる奈ぬ一寸の鉄炮耳
ずと寄くと寄しく義治山乃林源氏が勝の義さより柴田勝家
明智光秀藤惠多年家一万余騎の大軍を率し岡の彦天
地を震ひ石山勢と八方より攻世道ぬまと巻よせうう石
山勢肝と冷一方を切破く退けくく一方に為く実之と
目よ余り小田の大軍場数功者の為率るれが実よ之こう彼奈よ
追よせ実敵羅例す時計の戦ひよ門後勢大ず討とうひく

佐々木勢方合戦

を逃さじ柴田勝家味方を知りて逃る者と追ひすがれて
諸軍とまどめ数十人の生捕を同道引入させ自刀と接て
一人の首と切落せば其余の生捕大きに恐れ面を変て去りぬ
皆同寺小南無阿弥陀佛〳〵弥陀の名号唱へ居る所石山本願
寺の門徒なりと強勝げふも空へ〳〵勝家大の眼を開き
伝蟲出り〳〵我言を聞よ汝は先の落城の本願寺よりの伏兵なり
疑し密に向快せばおのれ等が命を助け此儘引去べしこれ
らの者ども〳〵すぼ〳〵と斬殺せよ其時本願寺へ立て行べき
がけなる所如坊主とひとり出て細首宙に飛さん返言せよ下
郎めと罵ば雷神のごとく雑兵ども詮方なく上京僧内今井権
七一人金瘡して浪一口に埋伏せり其外伏勢多くこれなく

未素地獄に陥落なる法も如此伝り毛頭見返し中々小勝家
大きに怒ひ上京を命じ生捕ども田宮と既せ味方の内に物
なれる兵に為せ敵六家の名号を云へる相手とも云へ見と指せ
計策を中含め浪一口へ出る

石山勢級軍之事

去程に本願寺の軍勢上京僧内今井権七両人一人金瘡の兵士
を率し浪一口に埋伏寄内の合戦に味方級小せ如
ら民秋て信長の級軍と実に喰と法欲を乞さんと行嘯を吾
で待とこの時に彼柴田が仕出を切て地来る軍師手率より両人の
を切て地来る軍勢升登らしめ自分の小勢を引て西道へ〳〵家田筑本

其二

を使く山傍より石明神の森とて上落合と旧ぶる所を過
よりて遥かの面く上落と流り揺毎水を激の勢ひにて合戦
よ及びに両人も多く狐川を打渡り上落に陣快し後と
こして戦ふ所しとの御幸なり急ぎ彼方人向ひ後とたいぐし
く岩ようなる上原今毋の両人つゝく甚大事と見る小神社に
上い字の名号と付石山ようの後者よ遠うけ及び仏りこい美よ
も知ゝ所きゝ山面に来く蟇として傍うて信長と結んゝく軍
勢と引率し擬にもんぐ狐川へ近行なる小忍ち岡の麓に面より
繰り男山のようなに雲霞のごく小田の軍兵激き出八方を五
囲ひ門徒勢大きに繁るき南妻三法歌の斗兵に漏さとり引よ
くと呼る程よ隙も無き右往左往逃行と嶮峯の絶頂より

大木大石を落し落ぬ両のごとし門徒勢数百人前陣を分と
ひしぐれ折重りて乱しうる柴田摩恵多軍扇を振き附多
る家ぞうゝくとゆ知るるゆゑ小田の人軍潮のごく退きて
新伏羅伏戦ふよでいくに人孔を立る門徒勢を追ふん
とさまよひく浪川の瀬るみよ退落され命と乞ふ者其数と
知ぬ上原今毋の両人も今い先とくひ多勢の其中へ
抜ひてうけ入る力の見行の打る斗火花をちらして戦いるゞ
其多金石にあるぐれ両人とも数不の多所ひ後よ孔軍
の中よ討死をぞ出うる小田勢い十分の勝利を以無軍川
と流りて山傍よ帰び信長卿先達て出不と着陣あり是後
勝軍の勢びと出家ぞ後の伯人を改ら出坂本として登

石山勢
敗軍

給ふさてもお敷寺の寺中より軍師を幸心よりそまぬ今日の
合戦追討の勝負いうぐぞと云心祈願うしたて見居て見接じ
るゞ絶ぬくやみくん又百余人の士卒を引ぐ十代の猛勢の也
威の美よくしたるを見て扱うけ白星の兜と菊の紋の勝を
書貝柄の槍引さげ石山の構と新出勢又星名剣地と来る石
山武者追く地来り味方の級軍上京今井が討死のさまに
に云上とれば幸弱る敵もとるゝ一参都て見我遅り之係みゞ
小田家の臣下より毎ひく誰うかくみゞ見軍配を知りや果て猿面
の小冠者太下長右郎が計策るゞ退け討崩さんと一緒合して
新出しを幸ゞ一族と川浪之介とらく者雲づくるとゞ止く
中るい軍師はじうすり山軍と退るゝ勢はじやや

残りを五謀乃ね幸名附冥とさくゞ退討て級と云うう和軍の
覆るを見く後軍のいはしろく為て清あり今却て軍師自退
討せんと給ふいるるゝのそやゞ幸笑ふく不潤見兵家の虚
くゞ実くゞ方う為味方と退んゞ心ゞ敵と退いはまゞとらく
心ゞ山ゞ敵に退討るくも利みるゝ又今流と軍敵ゞ敵も味方
退討退討るの心自山ゞ見に出く退討人と勝ゞらゞ
ゞくゞ我とゞけと云捨く新出せば川浪も其理と服は勝又
百余騎砂烟をとく退けうう其日の申の魁計と後の山方と
荒本摂津守村重引引勢と退付く一言の向者と及ゞゞ
嘲ひく実云ばとひゞけるさ荒本ゞ軍我敵ゞくくるのく
勢るきさまゞ討る者忽七十余人に方へ級と云荒本村重

酒天童子巻之六
殺木童丸
荒木村重
武ふ

此ありさまを見て大きに怒り何者なれば我軍中を横切れと
思ひや一槍に突殺さんと進る味方を目掛けて陣所に馬と
乗出し一揆衆の大将何奴なるぞ名のれ名のれ名乗て
出よと呼はりしが重乗も陣所に馬と駐出荒木摂州殿と見
しい俳回りかくや某い紀州義白の住人給本源左衛門尉重乗なり
いざ見参と罵て槍をひねり突来る村重枕いやゆる中軍師給本重乗ごさんなれ突来
んぞ槍と合せ龍のごとく躍て虎のごとく駐て秘術を尽す村斗り
戦ひなるが双方ゆゆる勇武の英傑流石武士と両軍皆
く叫りとなげき息をつめて見物に荒木元茂大力重の者なれば
唯一槍とひしと重乗が勇気出もたゆまじ繰出し槍先を排い

挟む村重が兜の吹返しをあらかじめ小突通されるくちびるを馬か
ぶりと落ちる重乗得りと槍を突出し下げ突に突荒木
が良名を又二十人班集りて駆ふく引退くと知るくみだれ
無いうでうこうふぎ風の本の柔をちらしに紀方へ引と進敵
重乗者もありぞく気色なく進る歩と退とぶふく山猪の町にて別
向ふをきんと見やりうふ厳強ふる武者三人余り凛然と俵
を立金の瓢覃の馬印と陣所に推立させ本下義右郎秀右衛門
よかうり重乗が来るぞ見くるとと白眼それへ来る者い給本源
左衛門重乗なりびや汝天道に逆ひ人倫に背き偽侍の名に恥
き合戦をとめく治を妨げ孔とはむ悪逆不道天地神明共に
你と誅伐せんと今日秀吉が謀中に落ち帰るべき治に進む

畠山重忠
梶原景時

諫とゞめんとて信長卿海ぶ旅と押し暫く家に帰城せしむ茶湯
を嗜み清潔に服を剃せよ倫理の際として敵軍補佐の信
長卿を退討きゝんとは命令ゝ以の曲者なる今日の後驚い来
下義吉郎秀吉が中務ろうたるぞよく弼門く冥途土の云者よ
せよと大声小呼られば軍奉義者より馬を立てつゝ少く秀吉が
容貌とおるゝ小長るゝ以面い猿乃ごとくゝ威風凛ゝこ傳
を拂ひ眼光人を射殺て面を對ひるゝ能ひ以夢天はして云語
さいやるゝ激よ天性の人傑ひ乳世を法むべきい必ず人るゝ以と
心中よ深く感じ軍とゝ退んとせが云乃若へもるさ以引
云ん い味方英気を考ふ方ゝと夢を揚て大きい笑ひ廉を退
箱いゝを見ゝと海人の悪と責る知ゝく自悪を改ることと

知ゝ以信長の英雄よ仕へ敵軍と挟て己が眼ゝと敵ひ絶よ天下
と称吾せんゝ以見よや以ゝ以ゝ敵軍と失ひ一度威嚇と震
ゝつゝ以ゝ以を已ゝ家名もゝ以滅せん海ゝ以英邪の信長を
挟け傷殺事舎と絶以豈を若人の不業と呪や弱を挟け
強と侵ぐ大英雄の心い海ゝ以知ゝ不ゝ以ゝ以と言を敬て罵ゝう
秀吉返答もゝく立ゝ以ゝ以人よ對ひ論い妥協と豪智の馬引
よせてゆゝまとおゝ乗て戦場よ對面せんと見ゝ以ゝ優ゝ
と工方さしてのゝ以ゝる

繪本拾遺信長記獨篇巻之六終